

令和6年度 府中町立府中中央小学校 学校自己評価表【当初評価】

学校教育目標	自ら伸びる 「問い直し」を大切にして、教育活動に山場を創り、「生きた言葉」で自覚化して、他者と関わり協力して乗り越えていく	経営理念 ミッション ビジョン	「学校は子どもが育つ土壌である」 （自ら伸びる意思の形成をなす土壌） 【使命】地域と共に児童も大人も共に成長していく機会・場を創造する学校 【経営展望】「教師こそ最大の教育環境」を自覚し、日々の業務の充実と研鑽に励む
--------	---	-----------------------	---

ビジョン (中期経営目標) 実現に向けての現状(進捗状況)と今年度の位置付け	<p>本校は、この3年間、「自ら伸びる」を学校の方向目標とし、児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていく教育活動を創造してきた。20年以上継続している「じまんの俳句」に加えて、特に令和4年度後半の配慮を要する児童の姿から「事案が生じた後の対応だけでは足りない。児童自らがより良い暮らしを創っていく主体者となることの方が大切ではないか。」との当時の教師たちの課題意識から、様々な目標が児童や教師にとって軸をもって追求しようと「はちの子の心得」の取組を中核として、暮らしの有りようを問い直しながら、「生きた言葉」を生み出す活動を積み上げてきた。</p> <p>さらに、令和5年度は、児童自身が山を創り、他者と協働しながら「群れ」から「集団」へ成熟していく過程を大切に授業や行事を創造してきた。特に最高学年の児童に対しては、全教職員が縦割り活動等での良いふるまいを価値付けるよう意識したり、地域行事へ参画させたりと、自己有用感を得る機会を生み出すことに力を入れた。その中で、最高学年である6年生自身が本校のめざすべきリーダー像を創っていくに至った。</p> <p>そうした中、教師は「はちの子の心得」が学校教育目標「自ら伸びる」を追求していく基軸となっていることを実感しながらも、全学年がそれぞれの発達段階に応じて「児童自らがより良い暮らしを創っていく主体者となっているか」を問い直した時、次のことに課題が見えてきた。すなわち、日々の暮らしの中に起こる様々な学級の問題に、児童一人一人が自分事として関わり、自分たちの問題として捉え、自分たちで解決の道筋を見出し、自分たちでよりよい暮らしを創っていくという学級づくり・学年づくりである。この課題の問い直しを通して、分掌主任等が中心となり、「本校は子どもをどのような存在として見るのか」と熟考し、「子どもは発達の当事者であり、未来の大人として敬意を払うべき存在である」という本校の子ども観を明確にした。</p> <p>そこで、これからの3年間は、これまで培ってきた「最高学年としてのリーダー像を6年生が創り出す」という方向性のもと、「じまんの俳句」「はちの子の心得」を中核とした教育活動を通してそこに現れてくる「子どもの姿」に、自分たちの「子ども観」を照らし合わせ、一人一人の子どもに発達の可能性を見出しながら、学級・学年・学校での関わり合いの中で、自ら根っこを太らせていく教育を追求していく。</p>
---	---

学校経営の柱に係る考え方

a 「生きた言葉」が生まれる学級・学年経営(学級・学年経営力)	学級・学年づくりが「自ら伸びる意思」の形成につながるには、「その子が出来事を通して仲間とどのように出会い、どのような関わろうとしているか」、「その子は、本当はどのように育ちたがっているか(児童のねがい)」という教師の目の向け方が大切である。この教師の向け方が、児童に「自分たち一人一人がより良い暮らしを創っていく主体者である」ことを意識付け、児童自身が学級の山場を創っていくと考える。そこで、中核の取組である「じまんの俳句」や「はちの子の心得」を中心に児童一人一人から紡ぎ出される「生きた言葉」を手掛かりに「その子が出来事を通して仲間とどのように出会い、どのように関わろうとしているか」「その子は、本当はどのように育ちたがっているのか」を問い直し、学級が学習集団として成熟していく学級づくりの在り方を追求する。
b 「問い直し」のサイクルを意識した授業づくり(教師の授業力)	学びの創造が「自ら伸びる意思」の形成につながるには、「自分たちで自分たちの学びを生み出そうとしている」姿や「自ら考え出そうとしている」姿に「発達の可能性」を見出していく教師の目が大切である。そこで、教師が「教えること」を児童に少しづつ委ね、児童の可能性を見出すことで、児童一人一人が、仲間とともに「問い直しのサイクル」を回し、自己選択・自己決定しながら学ぶ楽しさを得ている授業づくりを追求する。
c 自己認識を問い直す行事づくり(児童自治)	行事の創造が「自ら伸びる意思」の形成につながるには、日々の係(委員会)活動や各種行事の中で、失敗したり、自分の思う通りにできなかったりと、自分を問い直さざるを得ない状況でこそ「自らの殻をやぶり、自らを成長させたい」との切実な願いが醸成されていく、この過程をいかに経験するかが大切であると考えられる。教師には、「今この児童がどう取り組み、どこにこの児童の主体を確立していく可能性があるか」と児童一人一人が経験しようとしている中に、一人一人のもつ良さや「発達の可能性」を見出していく教師の目が切実に問い直される。そこで、各種活動や行事を通して、児童が「自らの殻をやぶり、自らを成長させたい」との願いの醸成に、教師の目が働いているかを問い直し、本校のリーダー像を6年生が創り出す姿を下学年が手本としつつ、前学年から引き継がれた可能性を、現学年が受け取り、伸ばしていく行事づくりを追求する。
d 児童や大人の集いが充実する環境づくり(地域との協働)	環境の創造が「自ら伸びる意思」の形成につながるには、児童を取り巻く大人たちが、互いにつながりながら共に成長していく土壌を創り出すことが大切である。そのためには、PTA活動を子どもの育ちを中心とした「保護者と教師の学習機会」として再構築しながら、保護者は「わが子」を「わが子たち」の関わりの中で見ていけるように、教師も「この子」を「この子たち」の関わりの中で見ていくよう、共に問い直しをしていく。また、学校にとって「地域の皆さんがいてくれてよかった」と思える活動に留まるのではなく、地域の皆さんにとって「府中中央小があってよかった」と思ってもらえる場・機会の有りようを追求する。

評価計画(中期経営目標を設定して3年目)

A 中期(3年間)経営目標	B 短期(今年度)経営目標	C 目標達成のための方策	主な成熟度		現状	D 評価指標	目標値(%)	E 評価結果			
								10月		2月	
								達成値	評価	達成値	評価
a 営構生「生きた言葉」が	り熟し学習集団として成	・「はちの子の心得」を軸に学級会での話し合い活動を深化させていく。 ・「じまんの俳句」を軸に暮らしの事実を価値付けようとする意識を高めていきながら、児童相互に作品を評価し合うことで互いの良さを認め合う関係づくりを構築していく。	4段階	児童も教師も意思を持ち、「生きた言葉」を交流しながら問い直すことで新たな山場が創られていく学級。	・「学校楽しい」と学級集団における適応感 ・「はちの子の心得」振り返りの記述が学年の目指す姿を現している	80%					
			3段階	児童が事実を目を向けながら「生きた言葉」を生み出し、教師はその熱を感じ取って価値付けを重ねている学級。		80%					
			2段階	「生きた言葉」で語ろうとしている児童を教師が大切にしている学級。							
			1段階	教師が発言や評言を促している学級。							
b 研意「研究問い進直し」授業を構築するを	室文教師づく目を磨き合う職員	・協働的な学びと個別最適な学びの一体化をめざした授業研究 ・教員の主体性に委ねたSD研修 ・教員の得意を生かす教科担任制の充実	4段階	児童が学び方を調整・選択しながら自分のタイミングで問い直しを重ね、次の学習や生活に生かしていく授業(自ら学びを創っている授業)	・他者とともに学び合う楽しさを味わう教師の割合 ・学力調査の全国平均以上の児童 ・「学校楽しい」と学習意欲	90%					
			3段階	学びのねらいに沿って児童が自分の思いや考えを自由に表現し高まり合う授業(教師が児童に学びを託す授業)		80%					
			2段階	児童の意欲を喚起する教材で授業に驚きをもたせ、児童相互が問いを深めている授業(教師の思いがある授業)		80%					
			1段階	教師の発問によって児童が答えを探し出している授業(教科書に沿った授業)							
c す自行事認識の問い直	すた行前事能学づく性をかり現ら学引年きで継伸がばれ	・リーダー育成とともに人と関わる喜びを経験する縦割り活動(異年齢交流) ・中学校の自治活動を見据えた児童会行事 ・取り組み方を児童に委ねた学校行事	4段階	各種活動や行事を自らの殻をやぶり自らを成長させていく山場ととらえ、次の活動に生かしている。	・「学校楽しい」と自己肯定感 ・「はちの子の心得」振り返りの記述が自己の目指す姿を現わしている、	80%					
			3段階	自分の強みや弱みを認識し、自ら選択した役割をやり遂げている。		80%					
			2段階	各種活動や行事に、相手の気持ちや立場を理解し協力して参加している。							
			1段階	各種活動や行事にまじめに参加している。							
d 実児す童や環大境人づく集いが充	動のコミニティ・スクール活	・地域とともにある教育活動を全学年設定(カリキュラム・マネジメント) ・保護者と教師が共に学び合う機会の創造 ・コミュニティ・スクールを核とした地域行事の創造	4段階	大人も児童も地域の一員として、地域に愛着や誇りをもつ状態。	・教育活動の満足度(保護者アンケート) ・大人が集う活動の満足度(地域アンケート)	85%					
			3段階	大人も児童も地域の一員として学校行事や地域行事を通して関わり合い、学び合う状態。		70%					
			2段階	保護者や地域が「自分に何かできることはないか」と当事者意識をもち、活動に参加している状態。							
			1段階	保護者や地域が各種たより等を見てサポーター活動に参加し、学校の様子を知る状態。							

